

## 長台関の悲劇

宮城県 菅原貞一郎

昭和十九年三月、関東軍第二十九師団（遼陽）が南方に出動したため、軍馬とともに第二十七師団（錦州）に転属し、山砲兵連隊付獣医官として中国方面に従軍、師団は京漢打通作戦に参加した。

作戦の末期、初夏とは名ばかりで麦畑の平野はすでに盛夏の暑さ、連日の夜行軍でただでさえけだるい体に、真夏の太陽がジリジリ照りつけ、睡魔と戦いながらの強行軍であった。確山あたりから日本と同じような田植え風景も見られるのどかな田園地帯となったが、そこで物すごい雨量をもたらした低気圧の襲来を受け、一夜にして一六六人の兵士を失うという、五月十四日の厄日を迎えるのだった。

昨夜の宿营地、三官廟を進発せよとの命令が下ったのは、その日の夕刻も迫るところだった。その一、二時間前

にも出発準備が発令されたあと、夜にかけてかなりの雨量になる公算があったためか、待機命令が出されていた。すでに降り出していたので雨の夜行軍になるのかと思うと、出だしからなんとなく気が滅入り、嫌な予感さえするのだった。

出発したころは静かな振り方だったが、行く手の空には無気味な暗い雲がぐんぐん広がり、太陽は見る見るうちに墨のカーテンに覆い隠されようとしており、やがて大粒の雨がバラツキ始めたかと思うと、空が割れたような土砂降りとなった。雨外套など全く用をなさず、出発して一時間もたたないうちに、全身濡れねずみになってしまった。

それでも薄明かりが残っているころはまだ良かったが、日没後、闇夜同様になってからは徒歩で行軍した。乗馬は歩き方が下手だったので、当番兵に馬を引かせ、私は愛馬の尾を固く握りしめたまま前進した。

道路は一本道なので、前方で転倒し起き上がれない馬があれば、たちまち雨の中で立ち往生、数分前進してはまた立ち止まる、といったことの繰り返しを続けた。

夜もふけるに従い気温も下がり、禪まで濡れてしまつて、ガタガタふるえ出した。おまけに長靴の中まで雨水が入つたため、靴下が濡れて靴擦れができたのである。歩くのに疼痛を感じるようになった。雨は依然として衰えをみせず、欲も得もなく、早く夜が明けてくれ、土左衛門にならないでくれ、と念じ続けながら濁流の中を、前進するのが精一杯だった。

一晚中一睡もできず、また一度も腰を降ろして休むことさえできなかった豪雨中の夜行軍で、心身ともにくたくたになり、生きる屍となつて彷徨した。

生き地獄さながらの一夜もようやく明けけるころ、猛威をふるつた雨も小降りとなり、大雨に洗われた部落の緑がひとときわ新鮮に映り、夜半のことが嘘のようにさえ思われた。いったん三官廟に引き返すことになったが、一晩かかってやつと数<sup>キ</sup>しか前進しておらず、夜明けまでのうち回っていたのだ。昨夜の行軍が実にむなしく感じられた。

私の場合、連日の強行軍は乗馬で、しかも当夜は銃も持たず軽装の体一つで歩いたのだが、それでさえ朝を迎

えた時、地獄から生き返つた思いがしたほどの難行苦行の一夜であった。

ここで徒步者特に歩兵兵士の状況を想像してみよう。背のう、弾薬、鉄帽に小銃を含めると、優に四〇<sup>キ</sup>の重量に上半身を圧迫されながら、数時間も行軍しつづけ、渋滞で何度も暗い濁流の中に立ち通しを余儀なくされれば、いくら頑強な兵でも体力は限界にくる。まして普段の行軍で落後するような弱兵は到底ついては歩けなかつたろう。

四〇<sup>キ</sup>の軍装の重圧で、兵の疲労困憊はその極に達し、疲労と睡魔の責苦によって、道路上の水嵩が増したときには転倒したら最後、身は完全に水面下にあるわけで、手に銃のないことに気付き、狂気のように手探り足探りをしていく中に、重石のようにのしかかる背のうのために、精根つきて濁水の中に吞まれた兵が多かつたと思われる。

日本陸軍の著名な遭難事故に、一九九人の凍死者を出した明治三十五年の八甲田山の雪中行軍があるが、長台関では一夜の雨の行軍で、若者ばかり一六六人が、夜が

明けて見たら忽然と死んでいたのである。古今東西の戦史に類例のない悪夢のような遭難事故がなぜ発生したのであろうか。

後日、聞いた話によると「相当の雨量になる」というのが各連隊長の一致した見方で、「十四日の夜行軍を十五日の昼行軍に変更することが望ましい」という要望を司令部に意見具申したという。しかし参謀長が米機の来襲をおそれるのあまりこれを却下した、ということだった。このことは待機命令が出発命令となって、夜行軍が強行されたことで頷かれる。

次に、帝国陸軍では兵器が人命より優先しており、特に菊のご紋章が刻まれた歩兵銃は、手放すことなどもつてのほか、命をかけても手中に取り戻さねばならなかった。

また日本では想像もつかない一日の中に夏と冬が同居しているような、気温の変化を伴う大陸特有の気象であり、車軸を流すような一大集中豪雨に見舞われ、さらに長途の南下作戦により体力が消耗しきった上での夜行軍といった、悪条件が重なれば、多数の遭難者を出したの

は当然の帰結であろう。

それにしても死んだ兵士たちこそ哀れであった。彼らはすべて「凍死(とうじ)」「死」ということで処理された。謹んでご冥福をお祈りする次第である。

## 戦史に残らない私の証言

和歌山県 杉 若 久 嘉

沖繩で玉碎した石兵团が、その前任地、中国山西省を発つとき、私は若干の考らに交じって、そこに残り残された。そして、その地の後任警備のため新たに編成された部隊、皇兵团の第一四七五部隊第一中隊に転属となった。

そしてこの部隊で敗戦を迎えたのであるが、それから後に体験した、戦史の光も当てられない悲劇の同胞について証言したい。

終戦の少し前から中国共産党軍は、積極的な活動を始めていた。それは日本敗戦近しと知って、日本軍駐屯地